

23年半と6カ月、そして折にふれて

名誉教授（環境共生学部） 飯尾 雅嘉

「23年半」を、「熊本女子大学 / 熊本県立大学」に昭和51年（1976年）4月から在職しました。大江の古い校舎が初めての任地。大江で共通一次の試行試験を実施した昭和55年の4月に月出（当時は健軍町水洗）に校舎が新築され、移動をしました。同時に、「文家政学部」から「文学部・生活科学部」の二学部体制に変更。その後、一般教育改革、「総合管理学部」の発足と共学化、そして「生活科学部」から「環境共生学部」への拡充転換などを経験致しました。

いろいろな大学変革がありましたが、私自身としては「生活科学部」から「環境共生学部」への変換が大きな経験として記憶に残っています。それはこの変換の取りまとめ役であったことに加えて、カリキュラムの編成、それを実現するための教員確保、許認可省庁である文部省との相談、免許関連で厚生省との折衝、また新学部棟の建築などの打ち合わせなどなど、広範囲に及ぶ作業を学部教員、事務局や県庁・私学文書課とともに行う必要があったからです。ご協力頂いた方々には改めてお礼を申し上げますとともに、ご迷惑をお掛けした方々にはこの場を借りて心からお詫びを申し上げます。

平成17年（2005年）に大学教員を退職しましたが、数年ののち、思いがけず熊本県立大学で産休教員の代わりに非常勤講師を務めることになりました。久々に懐かしい教壇に立ち、学生さんの一人から「私の母も先生に習いました」と言われ、自分の年齢を改めて感じた次第です。「6か月」とはこの非常勤講師の期間を示しています。

「そして折にふれて」、阿蘇で野焼き支援ボランティアとして県立大学の学生さん「もやいすと」に草刈りの指導をしました。実際に野焼きに参加する学生さんが少ないのは残念ですが・・・

人生の活動期に色々な経験をさせて貰った「熊本女子大学 / 熊本県立大学」に感謝し、今後の一層のご発展を祈ります。

時代の要請と地域の期待に応える熊本県立大学

名誉教授（総合管理学部） 中宮 光隆

創立70周年、おめでとうございます。

熊本県立大学は、熊本女子大学の時代から現在に至るまでの年月をただ歩んできたのではなく、優れた人材を輩出し、高水準の研究成果を上げ、地域と連携してその発展に貢献してきたと思います。その意味で、高等教育機関として重要な役割を果たしてきたと言えます。最近私は、仕事の関係で県内各地を回りますが、いくつもの市役所や町村役場で、そこに勤務する本学の卒業生に会います。企業や金融機関で活躍する多くの卒業生にも出会います。

現在、大学関係で全国的に推進されている事業に「地（知）の拠点整備事業」（COC）と「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC+）があります。本学は平成26年に前者の事業に選定され、翌年から熊本大学が申請校（幹事役）となり本学を含む県内7大学・高専が参加校となって後者の事業に取り組んでいます。この事業は、地方の過疎化と高齢化に歯止めをかけ、地方創生を実質的に実現するために、地方における雇用創出と若者の地元定着、地域のリーダーとなる人材の育成を目的にしています。

熊本県内の取組の中で、「第1次産業の競争力強化と6次産業化」に関しては、県立大学が、県内でCOC+事業に取り組むすべての大学・高専のリーダー役を務めています。この事業を通じて県内の大学・高専の連携が深まったことも、成果の一つです。シンポジウムを熊本市内や天草で開催し、また「6次産業化」をテーマに大学の研究を紹介する『シーズ集』を作成しましたが、それらにも事業に取り組むすべての大学・高専が協力しています。一つの大学ではなく多くの大学の研究をひとまとめにしたこの『シーズ集』は、高い評価を受けています。

COC+事業を通じて、私は熊本県立大学の優れた点を再確認しています。第1に、大学の部局や教職員がバラバラではなく、一体になっていることです。各学部（部局）が持つアドバンテージをたがいに生かしながら、それらを結合することで課題の処理・解決により強い力が発揮できていると思います。第2に、専門研究と教育・社会貢献のいずれも重視し、バランスの取れた運営がなされていることです。これによって大学の構成員（特に教員）が個性を生かしつつ能力を発揮できていると思います。第3に、あらゆる課題に積極的に取り組んでいることです。その場限りの対応で課題を乗り切ろうとすれば、発展は望めません。

このような熊本県立大学の優位点は、よく言われる「小さいながらも人文・社会・自然の3分野を擁する総合大学」であることや「大学の本来の使命を堅持しつつ、時代や社会の要請に積極的に対応する大学」を造りあげてきたことにあると思います。それが熊本県立大学の伝統であり、今後も地域の期待に応えられる保障であると思います。

最良の日々

元文学部教授 徳永 紀美子

創立 70 周年、おめでとうございます。

私は平成九年から平成二五年までの一六年間を熊本県立大学文学部英語英米文学科で過ごさせて頂きました。それ以前は工業大学で英語を担当していました。ですから赴任前は、文学部で専門のアメリカ文学を担当できることが大変嬉しく、またその一方では学生の皆さんに有益な講義や演習、卒論指導ができるか不安でいっぱいでした。

しかし、懸念していた授業もはじめこそ手探りでしたが、真面目で熱心で伸び白が大きな学生の皆さんに助けられました。受講生の「？」を「！」に変える手助けをするつもりで最初は聞いてもらうだけだった授業も受講生の様々な発言が得られる形へ変化し、程なく教員生活で初めて、「打てば響く」という喜びを実感するようになりました。授業中に、時折（高尚な？）笑いがおこることも楽しい出来事でした。振り返れば、私も学生の皆さんに育てられ、共に学ぶことができた、教員として最良の日々でした。

教育以外では、事務局や同僚の皆様にご助けいただき、なんとかやっていくことができました。特に文学部の先生方には、仕事をする上で、現実を正しく把握しながらも理想を諦めてはならないことを教えられました。社会人としても最良の日々を送らせて頂いたのです。

近年、文系は非実用的だと批判されがちです。しかし、文系は、物事の枠組みやそれを捉える視点、価値観など、自己や世界を見る目に関わる根本的なことを扱う大切な役割を担っています。また、文系の学問は人の生き方や世界の有り方についてだけでなく、死についても正面切って取り組んでいると言えます。

大学での勉学や体験が学生の皆さんの視野を広げ、多様な文化と価値観に対する理解や共感を産み出せるといいなと思います。そして、それを自分の生活の中で活かしたら、個々の人生も世界ももっと良いものになるような気さえます。

今後も熊本県立大学で学ばれた皆様が知性と感性を身につけて巣立って行かれることと、大学がますます発展されることを願って止みません。

大江から健軍キャンパスへ

元環境共生学部教授 重松 三和子

熊本女子大学教養部体育助手として着任したのは昭和 45 年でした。

当時の教授は、通称「バトキチ」の伊藤基記先生で、二人で 2 学部の体育と理論を担当していましたので、学生にとっては幸か不幸か全ての名前と顔は覚えていました。

大江キャンパスのグラウンドは、クローバーの茂る広っぱとの表現がぴったりの狭いものでしたが、体育館はバトミントンの実技には適当な広さがあり、その施設をフルに活用して「自主的に健康に生涯を過ごすための基礎と習慣づくり」を目標に学生と共に身体活動を通して過ごした時間を懐かしく思い出します。

校内での活動だけでなく、移動が大変でしたが水泳は城内プール（現城彩苑）、冬はスケート場（YMCA やサンピアン）に出かけ、屋外で雨の日は傘を差して滑ったこともあり、「メリーポピンズ見たい！」と愉快的ひとコマもありました。

阿蘇の山並みを望む白亜の健軍キャンパスに移転したのは昭和 55 年。

当時キャンパスから阿蘇の噴煙が本当にはっきり見ることが出来ました。

大江に比べて体育館・第 1 グラウンド・テニスコート・第 2 グラウンドと充実し部活動も伸び伸びと出来るようになりました。

平成 6 年男女共学の総合大学 熊本県立大学としてスタートし学生数の増加、男子学生も入学し第 2 体育館とプールも建設され、体育も生活環境学部にも所属して専門科目も担当するようになりました。科目名も「生涯スポーツ実習」として専任 2 名・非常勤 3 名体制で、より幅広い選択が出来るようにコースを設定しました。ゴルフコースは、近くの練習場まで出かけ、最終日は高遊原 GC のミニコースで仕上げのラウンドを実施。卒業生から「あのゴルフ経験が大いに切っ掛けになりました。」との嬉しい報告もありました。

これからも大学での「生涯スポーツ実習」の経験を生かし、健康で澆刺と充実した人生を送っていただきたいと願っています。